

豊丘村図書館の新刊コーナーより・・・3月定例会中に・・・

令和2年度予算審議の分厚い資料。行政用語に頭も心もいっぱいになる。
そんな日々の就寝前の心の開放に・・・と手にした本。

「生き物の死にざま」

限られた命を懸命に生きる姿が胸を打つ エッセイ

稲垣 栄洋 著

発行 草思社

目次を開くと・・・



- 1 空が見えない最後(セミ)
- 2 子に身を捧ぐ生涯(ハサミムシ)
- 3 母なる川で循環していく命(サケ)
- 4 子を想い命がけの侵入と脱出
- 5 三億年命をつないできたつわもの
- 6 メスに食われながらも交尾をやめないオス
- 7 交尾に明け暮れ、死す
- 8 メスに寄生し、放精後はメスに吸収されるオス
- 9 生涯1度きりの交接との子への愛
- 10 無数の卵の死の上にいる生魚
- 11 生きていることが生きがい
- 12 海と陸の危険に満ちた一生
- 13 深海のメスのカニはなぜ冷たい海に向かったか
- 14 太古より海底に降り注ぐプランクトンの遺骸
- 15 餌にたどりつくまでの長く危険な道のり
- 16 卵を産めなくなった女王アリの最後
- 17 戦うために生まれてきた永遠の幼虫
- 18 冬の前に現れ、冬とともに死す「害虫」
- 19 老化しない奇妙な生き物
- 20 花の蜜集めは晩年に課された危険な任務
- 21 なぜ危険を顧みず道路を横切るのか
- 22 一生糞を出ることなく生涯を閉じるメス
- 23 クモの巣に餌がかかるのをただただ待つ
- 24 草食動物も肉食動物も最後は肉に
- 25 出荷までの四十五日間
- 26 実験室で閉じる生涯
- 27 ヒトを必要としたオオカミの子孫の今
- 28 かつては神とされた獣たちの終焉
- 29 死を悼む動物なのか

新型コロナウイルスの感染拡大で、先日 緊急事態宣言が7都府県に出令され、長野県下でも再開したばかりの学校も再び休校に。家に閉じこもり、宿題もテレビゲームにも飽き飽きしたこどもたち。家族でも、一日中一緒にいることの息苦しさは誰でも感じているところだと思います。

医療の最前線で感染の危険にさらされながら治療にあたっている方、生活を支える業務のため勤務されている方に思いをはせる一方、有り余る時間は、多様な生物の一つでしかない人間の存在、あり方を見つめ直す機会を与えられたように思えます。

こうしている間にも、人間以外の生物は、他の生物との関りの中で、自分たちのいのちを繋げる営みをしています。長寿高齢化社会となった、いわゆる先進国の人間社会。次世代へ、そしてそのまた次の世代へ『いのちをつなぐ』という視点をもう一度考えるべき時なのではないでしょうか。

29章の生物の死にざま(=生きざま)に触れて、感じるものがありました。

4章以降で登場する生物は…

- 4 アカイエカ 5 カゲロウ 6 カマキリ 7 アンテキヌス 8 チョウチンアンコウ 9 タコ 10 マンボウ
- 11 クラゲ 12 ウミガメ 13 イエティクラブ 14 マリンスノー 15 アリ 16 シロアリ 17 兵隊アブラムシ
- 18 ワタアブラムシ 19 ハダカデバネズミ 20 ミツバチ 21 ヒキガエル 22 ミノミシ 23 ジョロウグモ
- 24 シマウマとライオン 25 ニワトリ 26 ネズミ 27 イヌ 28 ニホンオオカミ 29 ソウ